

はじめに ヘルムート・ティーリケはドイツの牧師です。最近あまり名前を聞くことがありませんが、ヨルダン社から数冊の著作が出ておりました。手元にある「神の沈黙」は1969年出版で、版元が倒産していますから古本屋で入手しました。「福音における現代人のつまづき」の副題があります。内容は、神義論とよばれるもので「神がおられるのになぜこの世に悪があるのか」、「神は本当に善であり、義であるか」等々、この世の悲惨から神の世界統治、摂理にたいして異議申し立てをする、あるいは、それを弁護する議論をさします。神学生時代に読んだ印象深い著作のひとつです。東日本大震災や、コロナウィルス感染症問題など、なぜ、どうしてとふだん宗教に縁のない人でも、神がいるならば答えて欲しい、というような非常事態、不条理と感じる事態がつづいている昨今ですので、この本を紹介しようと思いました。なにぶん古い本なので、すこし手をいれて紹介します。今回は「信ずることと疑うこと」という表題の文章の前半部分を。

「神が義であり、より高く、意味深い配慮が、わたしたちの人生に向けられている」という聖書の主張は信じるに値するか。ヨブを例にして考えてみよう。

第一段階

誘惑者(サタン)がヨブを撃つ。財産・子どもを奪い、幸福で敬虔な生活の高みから、裸と飢えの困窮に突き落とす。

ヨブの反応 「主は与え、主は取り給う。主の御名は讃むべきかな」(1:21)
＝ヨブは敬虔な教えにまだ立っている。

第二段階

誘惑者(サタン)がヨブの生命を撃つ。足の裏から頭の頂きまで腫れ物に覆われる。

ヨブの反応 今一度、神の教えにすがる。悪しきものも恐るべきことも、神の御手から受けなければならない。良いものも神から贈られて得たように。しかし、やがてすべては無意味ではないか、という思いがヨブを捉える。彼には苦痛と、彼を訴える友人しかいない。

「ヨブの背後には、誘惑者が立っていて、可能性、すなわち苦痛における人間としての可能性の限界が、いつ破られるかを心待ちに砂時計で測っています。しかし、まずヨブは、神の御旨をさらにより深く識ろうとする。ヨブは神が加えたもうたこれらすべての苦痛を通して、神が彼に何を言おうとされるかを探し求めようとします。しかし、誘惑者は悠然と笑っています。いずれ、自分がこの勝負に勝つであろう。誘惑者にはふたつのもの、時と苦痛が自分の味方をするのがはっきりわかっています。(下線横山)

誘惑者は知っている。苦しみを通して成長しようとすることは、いわば、苦しみを〈教訓〉に役立たせようというにすぎないことを。(中略)もし、ヨブが、彼が出会った苦難から学びつくした(たとえば神が与え、神が取りたまい、また神が主であることを)その時に、苦難の意味は満たされたのだから、苦難は止むに違いないと思うだろう。」

※しかし、なおも苦難が続いたとき、ひとはどうなるのでしょうか。(つづく)